祈りの内実

――如来の祈りと衆生の祈り――

新 井 俊 一

1. はじめに

浄土真宗は「祈りなき宗教」と内外に公言し、それを浄土真宗の顕著な特色の一つとしている。筆者は親鸞の思想を学ぶものとして、この立場を理解するし、それを否定する意図はない。しかし同時に私の懸念することは、「浄土真宗は祈りなき宗教」という表現は内部のものには理解できても、浄土真宗の外にある人々や浄土真宗にまだ入りきっていない人々、さらに外国人で浄土真宗に始めて接触した人々には理解することがきわめて困難であろうということである。小論は「浄土真宗は祈りなき宗教」という表現の真意には同意しながらも、通宗教的観点からよりよい表現を求めることを目的としている。

2002年12月10日付『毎日新聞』は第一面に「祈り"公認"――浄土真宗本願寺派」という見出しを掲げ、おおむね次のように報道した。

2002年12月9日に本願寺派宗会で当時の教学研究所長の大峯顯氏が「『祈り』とは聖なるものと人間との内面的な魂の交流であり、あらゆる宗教の核心。『祈り』の概念は現世利益を求める祈とうよりも広く、祈りなくして宗教は成り立たない」と明言した。さらに大峯氏は、「(真宗では) 祈りの概念を論理的に整理してこなかったため矛盾感が祈りの内実(新井俊一) - 221-

表面化してきた」と説明し、「言葉の表面的な意味で『真宗は祈らない』と単純に割り切るのは教条主義だ。死への恐怖と言った人間の根元的な問題に答えず、『現世利益は求めない』と言っても説得力がない」と話した。(要約文責は新井)

もしここに報道された大峯氏の発言を100パーセント事実として信用するとしても、発言の内容と、「浄土真宗本願寺派が祈りを"公認"した」という毎日新聞の報道とは大きな隔たりがある。大峯氏は宗会での質問に答えて宗教学者としての見解を述べたのであって、それを宗会が本願寺派の正式の見解として承認したわけではない。

しかしマスコミの影響力を憂えた本願寺は12月20日付『本願寺新報』で、本願寺派が祈りを公認したという毎日新聞の報道を否定し、さらに2003年2月29日付『本願寺新報』で本願寺派勧学・普賢晃壽氏が「浄土真宗は祈りなき宗教」という題で従来の本願寺派の立場を再確認しておられる。普賢氏は「祈り」と「信心」とは異なるものであることを強調され、「信心」は「まこと」なき身を信知したものが如来の願力に全託することであり、「そこには祈願請求の意味は全く存しない」と言われる。また親鸞がいう「世のいのり」とは、「現世祈禱・祈願請求の意ではなく、常行大悲の益に生かされる念仏者の仏法弘通・平和へのおのずからなる素純な願い、ひたすらな思念と解すべきであります」と言っておられる。

しかしここで大峯氏と普賢氏の議論がすれ違っていることに注目したい。 大峯氏は「現世利益を求める祈とう」を退けながらも、宗教的観点から言 うと「祈り」には「祈願請求」よりもずっと広い意味があることと、「浄 土真宗は祈りのない宗教」という表現が理解されにくいことを指摘してお られる。それに対して普賢氏は始めから「祈り」を「祈願請求」という限 定した意味に取っておられ、その上で「祈り」を全否定しておられる。普 -222- 祈りの内実(新井俊一) 賢氏は、親鸞が「世のいのり」と使う場合でも、それは念仏者の素純な「願い」であって、自分の往生や世の中の平和を如来に請い求めているのではないと言われる。しかしこの部分は親鸞が念仏の内容として言っている言葉であり、それを「素朴な願い」と決めつけて良いものであろうか。 氏の論理は、「信心」と「祈り」を区別するために、「祈り」の意味と用法を無理に限定しておられるとしか見えない。

「祈り」という言葉は、祈願請求、祈禱、祈念という意味から、願い、願望、さらには「聖なるものと人間とのたましいの交流」というように極めて広い意味を持っている。その点でも「祈りはあらゆる宗教の核心であって、祈りなくして宗教は成り立たない」という大峯顯氏の提言を一概に浄土真宗の宗義に反するものとして排斥することはできない。そもそも「祈り」と「願い」にそれほど相違があるものであろうか。親鸞自身が「祈ってはならない」と言ったとは聞いていない。このように言われるようになったのは後世の宗学の発展上に起こったことではないかと、私は考える。

浄土真宗は阿弥陀如来の本願をかなめとする宗教であるが、この「本願」はまた「誓願」とも「誓い」とも「悲願」とも呼ばれる。これらの言葉を如来の「祈り」としても全く差し支えないのではなかろうか。私は「浄土真宗は祈りなき宗教」と言って「祈り」を排斥するよりも、「浄土真宗は如来の祈りの上に立つ宗教」と言い換えた方がいいのではないかと提案したいのである。

2.「祈り」の内実

そこで次に、浄土真宗の宗義から離れて、「祈り」という言葉の意味か 祈りの内実(新井俊一) — 223 — ら考えてみたい。『広辞苑』によると「いのる(祈る,禱る)」とは、

①神や仏の名を呼び、幸いを請い願う。祈願する。②心から望む。希望する。念ずる。③ (相手や物事に) わざわいが起こるように祈願する。のろう。

とある。浄土真宗では「祈る」という言葉を避けるあまり、「あなたの早いご回復を念じあげております」とか「願っております」とかいうが、それは上の②の意味では、「お祈りしています」と全く同じことを言っていることになる。

次に「祈り」という行為の内容を考えてみる。第一に、「祈り」は人間 の行為の中でも意業、すなわち心に思う行為である。心に思う内容は、今 の自分の力では簡単に成就できないことである。 因果律の観点から言うと, 祈りは因に当たるものであり、その目指す状態が果である。第二に、どう いうときに「祈り」や「願い」が起こるかと言えば、それは普段の状態と は異なる状態を強く希求・欲求・願望するような非常事態の中で、感情の 高ぶりがあるときである。第三に、「祈り」には対象がある。すなわち自 分のために祈る場合と、他者のために祈る場合である。その対象が今と異 なる状態になることを願うのが「祈り」である。ちなみに対象が今よりも 悪い状態になることを祈る場合は「呪い」であり、「祈り」と「呪い」は 紙一重の相違である。第四に、「祈り」の成就を自分の力で達成しようと する場合と、自分よりも強力な他者の力によって達成しようとする場合が ある。第四に、「祈り」の内容を自分で成就するためには非常な努力が必 要であり、成就した暁には祈りの主体はその努力を通して以前よりも大き な力や地位を得ると考えられている。「念力」とか「願力」といわれるも のがそれである。第五に、祈りの対象にも上述の願力によって、祈りの内 容に相応した変化が起こると考えられている。

- 224 - 祈りの内実(新井俊一)

3. 事 例 報 告

私は2004年8月22日から9月11日にかけて、学生の引率でオーストラリアの Toowoomba 市に滞在した。その時の私の体験は、「祈り」についての普遍的問題に関わるので、以下に少し詳しく述べてみたい。

私は同市の南クイーンズランド大学の学生寮に滞在したが、そこの学生 食堂で36歳の男性(仮にジョンと呼ぶ)に紹介された。ジョンは大きく強 そうな肉体を持っているが、明らかに身体障害者であった。もともとラグ ビーの選手だったが、29歳の時、試合中の事故で一時は植物状態になり、 現在の状態まで回復した。記憶障害もあるとのことである。当時フィアン セもいて結婚するはずだったが、彼女はジョンとの婚約を解消して彼の友 人と結婚した。

ジョンは慢性的に落ち込んでいるようで、始めて紹介されたときから、 "I'm no good. Don't you think I'm no good?" (僕は良いところが全くない。 そう思わないか) と言ってきた。また他人から親切にされるのに、自分の 方から何もお返しができないことが心苦しいらしく、"I'm no use for society. People help me a lot, but I cannot do anything for them in return." (僕は社会には何の役にも立たない人間だ。人には助けてもらうけど、自分は何もお返しできない)と何度も言った。さらに"I'm worthless." (僕は何の値打ちもない人間だ)と言い、"I have no self-confidence. My self-confidence has completely gone." (僕には自信が全くない。そんなものは完全になくなった)と言った。しかしそういう自嘲的・自棄的な言葉以外に、少し心が落ち着くと、"It's hard to accept my reality, but I'm trying to live my life to the best of my ability." (現実を受け入れるのは難しいが、全力を振り絞って、自分の命を生きようとしているんだ)とも言っていた。

祈りの内実(新井俊一) - 225 -

しかし私が仏教の僧侶だと知ったとき、ジョンは次のように言ってきた。 "Toshi, please pray for me, so I can be a good person again." (トシ (私 の名前)、どうか僕がもとの良い人間になれるように祈ってくれ。)

"Toshi, please bless me." (トシ, どうか僕を祝福してくれ。)

ジョンがこう言って私の前で頭を垂れたとき、「すまない。わが宗教では利己的な欲求が適うように神や仏に祈ったりしないのだ」とはとても言えなかった。ジョンはキリスト教での祈りや祝福の行為を私の信奉する仏教(この場合、浄土真宗という宗派の特徴は論外となる)からも当然のこととして期待したのである。しかしジョンがこのような依頼をしてきたのは、仏の力を借りてもとの体になることを望んだというよりも、彼のこの世での存在をキリスト教以外の聖職者にも認められたいということであったのであろう。そこで数日後、私はまたジョンに会って、ちょうど持ち合わせていた英訳 Dhammapada の表紙裏に次にように書いて贈った。

Dear John, this is where my heart rests. May you be embraced by the Compassion of the Buddha and awaken to Truth soon. May you love yourself just as others love you. My thought will be always with you.

(ジョン,これが私の心の拠り所だ。あなたが仏の慈悲に抱かれ、早く真実に目覚めますように。他人があなたを愛するように、あなたも自分を愛することができますように。私の思いはつねにあなたのところにある。)

私はジョンのために祈ったのであり、本人はこの言葉を喜んでくれたが、これがその時、僧侶としての私のできる最善のことであった。これによって私は、自分には彼の苦衷を救う能力のないことを認め、仏の慈悲をジョンに伝え、私の友愛の心を表現したのである。祈りは必ずしも利己的な欲 -226 - 祈りの内実(新井俊一)

求満足のためだけにあるわけではなく、かえって自力を否定し、仏の働きを知らしめ、相手を受け入れる働きをする場合もあるのである。浄土真宗が普遍宗教であるためには、祈りを完全否定していては、せっかく浄土真宗の門まで来た人を門前払いを食わせることになるのではなかろうか。

4. 衆生の祈り

ここで親鸞による「祈り」の用例を検討してみたい。先ず第一に「祈り」を否定的に使っている場合である。

なっこう 仏号むねと修すれども $\frac{\%}{2}$ 世をいのる</u>行者をば これも雑修となづけてぞ 千中無一ときらはるる

(『高僧和讃』 善導讃; 『浄土真宗聖典』註釈版, p. 590) ここで述べられている「現世をいのる」とは,「現世で功徳を積んで往生 に役立てようと願う」という意味に解釈されている。このような用法は 『歎異抄』にも現れる。

また念仏の申されんも、ただいまさとりをひらかんずる期のちかづくにしたがひても、いよいよ弥陀をたのみ、御恩を報じたてまつるにてこそ候はめ。罪を滅せんとおもはんは、自力のこころにして、<u>臨終正念といのる</u>ひとの本意なれば、他力の信心なきにて候ふなり。

(『歎異抄』第14条; 『浄土真宗聖典』p. 846)

「臨終正念といのる」とは、本願を完全にたのむことができないで、生前に罪を自分の力で滅することによって臨終の時に如来の来迎を得ようと努力することである。この「いのる」は「一所懸命に請い願う」という意味であろう。

さらに『歎異抄』第15章には、

おほよそ今生においては、煩悩・悪障を断ぜんこと、きはめてありが たきあひだ、真言・法華を行ずる浄侶、なほもつて<u>順次生のさとりを</u> <u>いのる</u>。 (『歎異抄』第15条; 『浄土真宗聖典』p. 847)

とある。「順次生のさとりをいのる」とは、「この世の生を終えて後、生まれ変わってきたときに仏の悟りを得られるように請い願う」という意味である。

同様の用例で注目したいのは親鸞の妻・恵信尼が,法然の専修念仏にあ う前の親鸞を語っている文である。

この文ぞ、殿の比叡の山に堂僧つとめておはしましけるが、山を出でて、六角堂に百日こもらせたまひて<u>後世の事いのりまうさせたまひける</u>九十五日のあか月の御示現の文なり。御覧候へとて書きしるしてまるらせ候ふ。 (『恵信尼消息』第1通: 『浄土真宗聖典』p.814) ここでは親鸞が比叡での修行に行き詰まり、先が見えないで暗澹たる気持ちで六角堂にこもって後世の往生を「祈って」いたことを語っている。

上の四つの例に現れる「いのり」、「いのる」はすべて、現在希求する状態が自分の力では成し遂げられないことを知って、後に成就することを強く願っている状態を表している。またどれも願いの成就を阿弥陀如来の救いの手にすがっているという点で、祈願請求の祈りである。

次に親鸞が積極的に「いのり」という言葉を使った例を検討しよう。親 鸞の消息に次のように現れる。

念仏者のものにこころえぬは、性信坊のとがに申しなされんは、きはまれるひがごとに候ふべし。念仏申さんひとは、性信坊のかたうどにこそなりあはせたまふべけれ。母・姉・妹なんどやうやうに申さるることは、ふるごとにて候ふ。さればとて、念仏をとどめられ候ひしが、世に曲事のおこり候ひしかば、それにつけても念仏をふかくたのみて、

世のいのりに、こころにいれて、申しあはせたまふべしとぞおぼえ候ふ。御文のやう、おほかたの陳状、よく御はからひども候ひけり。うれしく候ふ。詮じ候ふところは、御身にかぎらず念仏申さんひとびとは、わが御身の料はおぼしめさずとも、朝家の御ため国民のために念仏を申しあはせたまひ候はば、めでたう候ふべし。往生をば不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして、御念仏候ふべし。わが身の往生一定とおぼしめさんひとは、仏の御恩をおぼしめさんに、御報恩のために御念仏こころにいれて申して、世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべしとおぼえ候ふ。よくよく御案候ふべし。

左訓:朝家の御ため 「おほやけのおんためとまうすなり」

国民 「くにのたみ,ひやくしやう」

『御消息集』第7通;『浄土真宗聖典』p. 783)

この文での「世のいのり」とは、「朝家の御ため国民のため」と「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」ということである。この国の政治を行うものばかりでなく民百姓も仏法を心にいただいて平和に幸せに暮らす状態が起こるように願うことを言っている。さらにここに引用した文で「往生をば不定におぼしめさんひとは、まづわが身の往生をおぼしめして御念仏候ふべし」や「世の中安穏なれ、仏法ひろまれとおぼしめすべし」とある「おぼしめす」も「願う」や「祈る」と同義語である。これらはすべて念仏を申すものの心の内容を言っている。

また親鸞は「いのり」を次のようにも使っている。

これにつけても御身の料はいまさだまらせたまひたり。念仏を御こころにいれてつねに申して、念仏そしらんひとびと、この世・のちの世までのことを、いのりあはせたまふべく候ふ。御身どもの料は、御念

仏はいまはなにかはせさせたまふべき。<u>ただひがうたる世のひとびと</u> <u>をいのり</u>,弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはば,仏の御恩を報 じまゐらせたまふになり候ふべし。

(『末燈鈔』第22通; 『浄土真宗聖典』pp. 807-808)

ここでは、念仏をそしる人々もこの世で念仏にあって後の世に往生するように祈りなさい、ということであり、またあとの部分も、誤った道に入っている人々も弥陀の誓いにはいるようにと祈りなさい、という意味である。その心は、念仏者といっても弥陀の誓いによって救われる衆生にすぎないから、他者はもちろんのこと、まして念仏をそしるものまで救うことはできないけれども、その人たちも、自分たちと同じように弥陀の救いに目覚めて、念仏によって往生をとげることができるように、と願え、と言うことであり、ここの「いのる」はまさに「願う」と同じ意味である。

否定的であれ、肯定的であれ、親鸞が自己を含めた衆生の行為として「いのる」という言葉を使うときにはすべて、自分の能力を超えた状態を如来の力によって成就することを願う意味に使っている。祈ることが如来の力を全肯定していることにもなることに注意したい。

5. 如来の祈り

「祈り」が「願い」の意味を強く持っているとすれば、如来の本願も「祈り」だといっても差し支えない。『大無量寿経』の「讃仏偈」では、「願はくは、われ仏とならんに、聖法王に斉しく、生死を過度して、解脱せざることなからしめん」から始まって、法蔵比丘の願いが縷々述べられる。そしてその願いを達成するために「願はくは、仏、わがために広く経法を宣べたまへ。われまさに修行して仏国を摂取して、清浄に無量の妙土 — 230 — 祈りの内実(新井俊一)

を荘厳すべし。われをして世においてすみやかに正覚を成りて、もろもろの生死勤苦の本を抜かしめたまへ」と言っている。すなわち法蔵比丘は、自分の能力を超えた願いを達成するために、世自在王仏の無上の智慧をお借りしたいというわけである。この行為は祈願請求とあまり変わらない。ちがう点は「もろもろの生死勤苦の本を抜く」とあるように、その願いの中に利己的な要素が全くないことである。このあと法蔵比丘は世自在王仏の導きによって自分の目標を明確にした後、五劫の思惟を経て四十八の誓願を建立される。これらの誓願は、それぞれの願文に暗示されているように、一人でも苦悩の衆生がいる間は働き続けるのであるから、「祈り」であることにかわりがない。

これらを考えると、鈴木大拙が最晩年に『教行信証』を英訳したときに、「信」を"Original Prayer"(原初のいのり)と訳したのも頷かせるものがある。また親鸞は「本願はもとより仏の御約束」(『親鸞聖人御消息』第42通:『註釈版』p.807)とも言っている。約束には片務的なものと双務的なものがあるが、本願は如来からの片務的な約束である。本願は衆生が「本願を信じ念仏する」という条件を達成したときに往生という形で果たされるものであるが、逆に言うと、如来が衆生のすべてがそうなるように、常時祈り、願ってくださり、その成就のために働いてくださっているのだと言える。

さらに検討すると、親鸞は『教行証文類』「信巻」の「逆謗摂取釈」に、 次のような『涅槃経』の長い引文がある。

またのたまはく(涅槃経・梵行品)「〈善男子,わがいふところのごと し,阿闍世王の為に涅槃に入らず。かくのごときの密議,なんぢいま だとくことあたはず。なにをもつてのゆゑに,われ《為》といふは一 切凡夫,《阿闍世王》とはあまねくおよび一切五逆を造るものなり。 また《為》とはすなはちこれ一切有為の衆生なり。……」

(『教行証文類』: 『浄土真宗聖典』註釈版, p. 279) ここで言われる「阿闍世王の為に涅槃に入らず」という文は, 釈尊の願いであり, 祈りであり, 誓いである。祈りの主体は釈尊であり, 対象は阿闍世, すなわち一切五逆の凡夫である。その目標は一切凡夫の成仏である。 釈尊は一切凡夫が成仏するように願い続け, それまで自分は法となって働き続けるというのである。ここでは祈りとその成就のための働きとが一致している。

6. 結 論

如来の祈りである本願と、衆生の祈りとを比較すると、共通点は、どちらも主体の強い願望である。法蔵菩薩は先ず自らが仏になることを願望し、仏になる究極の目的を衆生済度においた。その心は「寂静にして、志、所着なし」とある(『大無量寿経』: 『註釈版』p. 15)。全く私利私欲の要素がなかったというわけである。それに対して衆生の願望は常に欲望にまみれている。欲望を持った心で往生の行をするのを善導は「雑毒の善」と呼んでいる。

もう一つ大切なことは、如来の祈りには行動が伴っていることである。そもそも人が他人のために祈るとき、口や心だけで願いを立てても何も起こらない。いくらその意図はよくても内容は空虚であり、結局は虚仮である。『大無量寿経』によると、法蔵菩薩は四十八の願を建てた後、「かくのごときの大願を具足し修満して、誠諦にして虚しからずからず。世間に超出して深く寂滅を薬ふ」(『浄土真宗聖典』p. 26)とある。本願は、まだその中に入っていないものにとっては、まだ成就していない如来の願いで-232- 祈りの内実(新井俊一)

あり、祈りであり、約束であるが、本願を信じ念仏するものにとっては、 すでに成就されているものである。

すべての宗教は、人間を超えた存在との交流である祈りから始まる、という観点からいうと、「浄土真宗は祈りなき宗教」という表現は、特に真宗に入りきっていない人に対しては、浄土真宗が宗教としての存在理由を自分で否定したような印象を与えるであろう。

確かに衆生が自分の願望を満たすことを如来に請い求めるという形での「祈り」は浄土真宗の根本的原則から言って否定されるべきである。しかし逆に言えば、人間の究極の願いとは、全く苦しみのない平安の世界に生まれることであり、そのような欲求を持つこと自体が如来の働きによるものである。その意味で、浄土真宗は如来の祈りの上に立つ宗教だと言える。この関係は親鸞が「念仏は行者のために非行・非善なり。わがはからひにて行ずるにあらざれば非行といふ。わがはからひにてつくる善にもあらざれば非善といふ」(『歎異抄』第8章)とか、念仏は「大悲回向」の行であり、衆生にとっては「不回向」の行(『浄土真宗聖典』p.241)、と言ったのと軌を一にしている。親鸞の「世のいのり」という言葉は、如来の働きの中、すなわち信心の中から言った言葉である。「世の中安穏なれ、仏法ひろまれ」というのは、如来の祈りの内容であり、それを親鸞が如来に代わって述べたのだと言える。

浄土真宗は如来の祈りの上に立つ宗教であるが故に、私たち衆生は祈る 必要がないのである。その点さえ明確にすれば、ことさらに祈りを否定す る必要はない。

参考文献

2002年12月10日付『毎日新聞』記事「祈り"公認"」。また同日の同紙夕刊のコラム「近事片々」にも関連した評論がある。

- 2003年2月29日付『本願寺新報』「浄土真宗は祈りなき宗教」本願寺派勧学・ 普賢晃壽氏
- 岡 亮二「親鸞聖人の他力思想」。武蔵野大学日曜講演集『心』第23集, pp. 89-104
- 『広辞苑』電子辞書版 (Sharp 社2004年製)
- 『浄土真宗聖典』(註釈版)